明石の史跡（７５）新撰組隊士・斎藤　一

元治元年（１８６４）６月５日夜、新選組の近藤勇らは、三條小橋の旅館池田屋に集合していた尊王攘夷派の浪士を襲撃。打撃をあたえたこの（池田屋）事件は、新選組の名を高めたものとして、よく知られている。

　このとき、当初は土方隊に加わり、井上源三郎にひきいられ、池田屋にかけつけた１１人のなかに、斎藤一なる人物が存在する。彼は、金１０両プラス７両を、恩賞として支給されている（以下に出典を明記しない場合は、松浦玲著『新選組』（岩波新書）による）。

　斎藤一の父は、明石藩の足軽といわれ、御家人株を購入することによって、御家人（ごけにん）となった。御家人とは「江戸時代,知行高 1 万石未満の幕臣のうち将軍に御目見の叶わない者」をさす。江戸中期には、１７，３６０人を数え（岩波日本史辞典）、株を購入したということは、幕臣になったわけである。息子の「一」は、江戸生まれの、江戸育ちといわれる（おそらく明石の土は踏んでいなかったと思われる）。２０歳での新選組入隊のきっかけは、不詳との由。剣術の腕前は、相当なもので、重用された。

　鳥羽・伏見の敗戦後、会津に赴くものの、榎本艦隊とともに北海道に向かった土方とは、袂をわかち、会津に残留するも、斗南（となみ）へ配流となった。

　維新後の斎藤は、警視庁に出仕。長男勉の誕生直後の西南戦争にも参加。明治２４年（１８９１）には、東京高等師範学校附属の東京教育博物館に、警視庁より転職。同３２年（１８９９）まで勤務。その後は、退職する同４２年（１９０９）２月まで東京女子師範学校の庶務兼会計として在職。奇しくも永倉新八郎と同じ、大正４年（１９１５）の９月２８日に生涯を閉じる。享年７２歳（伊東成郎著『斎藤一が封印した「沈黙の明治」歴史読本５０巻９号』参照）。明石人の血をひいた人物としては、巧みな処世（過去を口の端にものぼらせない、という封印の仕方）であったといわねばならないだろう。

日本歴史学会会員　　茨木　一成